天眼鏡

炸裂する「農民ダイナマイト」

ＴＰＰが大筋合意して約２か月。政府は「日本の未来を切り開く歴史的第一歩である」と自画自賛しているが、当然のことながら現場での違和感は強い。農業の体質強化を急ぐとして、畜産クラスター事業の拡充や輸出の促進を打ち出す一方で、肉用牛肥育経営安定特別対策事業（新マルキン）や養豚経営安定対策事業を法制化し、補填率も現行の８割から９割に引き上げるなどの経営安定対策の拡充をはかるとしている。これに対して早々に産業競争力会議のメンバー等からは「農林漁業者への対策や予算は過保護農業をつくるだけだ」との批判が投げつけられている。輸入自由化を促進して畜産をはじめとする第一次産業を追い詰め、国の支援なくしては経営が成り立たなくしたうえで、万全の対策を講じたように見せかけながらも、支援の水準の引き下げをはじめとするはしご外しをチラつかされたのでは到底、将来展望を描くことはできない。これでは新規就農は勿論、後継者の確保は望むべくもない。

話しは一転するが、こうした情勢で停滞感が漂う中、甲府盆地の一番東京寄り、大菩薩峠のふもとの傾斜地にある甲州市神金地区で、この11月23日に「農民ダイナマイト」が開催された。ここは桃を中心とした果樹地帯で、一部野菜や花卉、稲作が行われている。畜産ではないものの、厳しい状況に置かれていることには変わりない。この地区の若者たちが、11月23日の勤労感謝の日にここ数年、毎年実施しているもので、普段は閑散とした集落にたくさんの出店が立ち並び、メイン会場の二か所ではコンサートが繰り広げられ、にわかに活気を帯び、大音響が鳴り響く。勤労感謝の日は、かつては新嘗祭として収穫に感謝するための国民の祝日であった。もはや豊作を喜ぶこともできなくなり、収穫に感謝する思いも乏しくなってしまったが、こうした状況だからこそ元気を出し、あらためて収穫を喜び合おうとして地元の若者たちが立ち上がったものである。何と２千人前後もの人たちが集まるというから驚きである。小さな集落につき地元の参加者は一部でしかなく、ほとんどは東京をはじめとする首都圏からの参加者と見た。目をひかれたのは、出店者も集まってきた人たちも30代、40代の若い人たち、しかも子連れが多いことである。若い人たちが家族ぐるみで、この条件不利地域の山村にも軽やかに足を運んでくる時代の到来を感じないわけにはいかない。

ここへの出店やコンサートでの演奏はすべてネットで募るだけで、ギャラを用意してきてもらうのではないらしい。皆、自腹で来て、勝手に店を開き、勝手に演奏して帰っていくようだ。集まってきた人たちも買い物を楽しみ、収穫体験農園で大根をひっこ抜いたり、音楽にあわせて踊ったりと、皆がそれぞれにこの空間と時間を楽しんでいく。

この地区にある温泉のご夫婦に、この集まりをどう思うか聞いてみたが、にぎやかすぎではあるが、たまにはそれもいいかな、といいながら、若者たちが地域の元気を引き出し、また都市部からいろいろの人たちに来てもらえることを素直に喜んでいた。若者たちにやらせてみる、見守ってやることが、彼らのパワーの発揮には欠かせないだけでなく、成長のエネルギーにもなる。「一億総活躍社会」などといって金で誘導するのではなく、自由にやらせ、これを支援していく仕組みへの転換が必要である。現実の厳しさには暗澹とするばかりであるが、かすかな光が差していることも確かだ。

（農的社会デザイン研究所代表　蔦谷　栄一）